



京都ワンディセミナー「ILL業務の事例報告」 (2005年5月14日)を開催しました

日 時：2005年5月14日（土）13:30-16:50
 場 所：キャンパスプラザ京都 2階 第2会議室
 主 催：大学図書館問題研究会京都支部
 参加費：無料

プログラム：

- 「立命館大学における図書館相互協力の現状と課題」
井上雅人氏（立命館大学総合情報センター）
- 「京都大学附属図書館における ILL 業務の現状」
大綱浩一氏（京都大学附属図書館）
- 「海外 ILL のすすめ」
大綱浩一氏（京都大学附属図書館）
- 質疑応答

京都支部、他支部そして会員でない方から 26 名の参加があり、国立情報学研究所 ILL 文献複写等料金相殺サービスや NACSIS-CAT/ILL 業務分析表などを中心に意見交換が行われ、活発な質疑応答のうち終了しました。

【目次】

京都ワンディセミナー「ILL業務の事例報告」(2005年5月14日)を開催しました	…	1
ネットワークが機能し便利だが・・・ - 京都市立図書館 -	…	2

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：dtkk@rg7.so-net.ne.jp（大学図書館問題研究会京都支部）

URL：<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

ネットワークが機能し便利だが・・・ — 京都市立図書館 —

竹本 文夫

<図書館で出会った現代の文学>

退職して十年近くたった2年前、京都市左京図書館へ在日朝鮮人作家ヤン・ソギルの作品がないかと行ってみた。主要作品が揃っていた。早速1冊借り出して読み、強い感銘を受けた。そこには在日朝鮮人の貧困な実態と彼らの恐るべき生活力、そのもとでの文学や音楽、祖国への限りない思いと一体になった社会的政治的活動が波瀾に富んだ筋を追って克明に描かれている。特に映画化された作品「血と骨」の中の作者の父親をモデルとした人物の生きざまは実に鬼気せまるものがある。以後彼の作品を次々借りて読んだ。

窪島誠一郎の父親探しの凄まじさや父水上勉との再会を描いた「明大前物語」、「父への手紙」、戦没画学生の作品についての「無言館物語」なども興味深く読んだ。そこから今度は逆に水上勉が我が子を捨てざるをえなかった時期を書いた「冬の光景」を読んだ。吉村昭の「落日の宴(うたげ)」は、幕府勘定奉行・川路聖謨(としあきら)の生涯だが、幕末の政治社会状況を幕府方の目を通して描いていて興味深かった。また、幕府にも多くの人材があり、彼等の努力が維新後の日本を準備していたことも分かった。吉村昭の人間、人生への深い洞察にも感動した。

津村節子の「流星雨」も戦争というものの理不尽さを、明治維新の際の会津戦争を、女性を主人公とすることにより浮き彫りにしたスケールの大きい秀作でこれまた深い感銘を受けた。

阿川佐和子や壇ふみのエッセイはNHK「私の本棚」の朗読で聞き、面白そうなので読みたかったが買うのはもったいないのですぐには読まなかった。だがこれも図書館にあった。中身は別にどうということはないが、軽妙でウイットにとんだ文章は、原稿書きに疲れたときなど恰好の気晴らしになった。阿川佐和子には「うめ子」という作品があり、なかなか読ませる優れたもので、世間で評判を呼んだエッセーとは違う彼女の側面を知って驚いた。

こうしたものが図書館で借りられてタダで読めることは実にありがたいことである。

<ネットワークの威力>

こうして書評やラジオなどで知った作家の本を左京図書館で探して読むようになった。左京になくても各行政区にある市立図書館19館の蔵書の検索が一度に出来、他の館の本が予約できる。しかも2~3日で現物が届く。最近の小説や話題の本などは何処かの館が所蔵しているので便利この上ない。全館19館のネットワークが極めて有効に機能していることを実感する。貸出は2週間、10冊まで。予約がなければ1回継続できる。

<本の情報はラジオからも>

実は在職中はもちろん退職後も数年は忙しくて小説やエッセイまで読むヒマはあまりなかった。たまに読みたいものがあったても大学図書館には新しい文芸作品、話題の本はほとんどなかったから結局読むことはなかった。

テレビは時々見ていたが、ラジオは殆ど聞いていなかった。ところが3~4年前から夜遅くまで起きているようになり、夜中もしばしばラジオを聞くようになった。そして話題の人、本の話、作品の朗読などをラジオで聞くようになった。冒頭に書いたヤン・ソギルという作家や窪島誠一郎を知ったのもNHKラジオの深夜便「心の時代」という午前4時台の番組である。この番組は本人自身が出演し、45分じっくり語る。しかもしばしば二日連続で放送される。今後も聞きたいと思ったがなにせ午前4時台ではしょっちゅう聞くというわけにはいかない。やむを得ず予約録音できるラジカセを購入した。夜中だけでなく昼間でも外出中に放送される番組が録音できるようになった。こうして雑誌新聞以外にもラジオからずいぶん情報を得るようになった。

市の図書館を利用するようになって私もやっと人並みにいま現代の小説や話題の本を読むようになったのである。

<アルバイト中心の図書館構想>

さて、便利さを知ると今度はそこで働く人々の実情や図書館発展の経緯が知りたくなり昨年7月ころから当事者に取材したり統計資料に目を通したりし始めた。

京都市は、図書館設立前に「運営は第三セクターの財団に委託し、非根幹業務はアルバイトが行う」という構想を発表した。つまりカウンターなど実際の業務は安上がりのアルバイトでこなすということである。当然図書館関係者や団体から批判が出た。だが京都市は、市民の意見や図書館関係諸団体の批判を無視し、財団委託でアルバイト中心、そして休館日なしをうたい文句に図書館を発足させた。

この経緯は、当時大図研でも議論になったので知っていた。だから京都市の図書館はどうせロクなものではあるまいと思って長い間利用しようとは思わなかった。しかし、今回利用してみてそうした思い込みは間違いとわかった。そこで働く人たちの長年にわたる努力で便利な図書館に発展していたのである。

<職員は一年契約の非常勤嘱託>

開館にあたって採用された司書の殆どは、一年契約の非常勤嘱託という不安定な身分、しかも4～6時間の短時間勤務、賃金は時間給というひどい労働条件だった。休館日なしという運営は様々な弊害を伴った。蔵書点検は出来ず、訊ねられた本が実際にあるかどうかさえ中々確認できない。毎日現場で生起する様々な諸問題への対応はその都度職員の判断で処理した。現場は大変だった。延滞中の人に貸し出さないというルールすら始めはなかった。司書たちは利用者の対応に追い回されながら喧々がくがくの議論を重ね、一步一步ルールを整備し、利用者の使いやすい図書館をめざして改善の努力を重ねた。

<組合を結成、多くの成果を獲得>

現場で働く人たちは、こうしたひどい状況のもとにあっても司書として仕事に生き甲斐を燃やし、より良い環境を求め労働組合を結成した。自分たちの労働条件だけでなく利用者のための改善も要求した。勉強もした。大図研京都支部のレファレンス研究会に参加する人たちもいた。誇りを持って働きながら組合活動を長年にわたり粘り強く行った。こうして蔵書点検のための休館が実現した。4時間とか5時間20分といった短時間勤務者の多くも次第に6時間ないし8時間の勤務になった。8時間勤務となった司書は正規職員としての地位を獲得、賃金も京都市職員の給与表を適用させることに成功した。

<市の職員並みへの道はこれからが正念場>

彼らの多くが正規の職員になったといっても京都市の職員ではない。「京都市生涯学習教育財団」という第三セクターの職員である。給与表の適用の仕方も市の職員とは違い実質賃金は低い。昇給は、3年に一度ないし5年に一度の昇給試験を受ける必要がある。市の職員にそんな制度はない。館長や係長（副館長格）は京都市から派遣されてくる。市にとって図書館は恰好の役職ポストを提供しているわけだ。最近財団職員の係長も一部実現したそうであるが今後どれだけ増えるか問題である。また、係長の一部実現は、組合員を分断し、労働組合の力を弱める恐れもある。新たなアルバイトも増えてきている。市の職員並み労働条件に近づくにはまだまだ長い闘いが必要と思われる。

<市民に根付くネットワーク>

さて、ネットワークだがかなり徹底している。貸出証はすべての地域館共通である。返却もどこへ返してもよい。何かの用で出掛けるとき途上に図書館があれば、わざわざ借りたところまで返し

にいかなくてよいわけで便利だ。

だが何と言ってもネットワークの威力は19の市立図書館の蔵書が事実上一つの図書館のものとして使えるということだ。実際検索してみると話題の本や文芸書などは実にヒット率が高い。そして予約してから2~3日で本が届くという迅速な図書の運搬がこのネットワークを実用的なものにしている。

<利用状況のあらまし>

蔵書数は、平成16年度現在、左京63,000冊、中央が343,000冊、19館全館では1,585,000冊。貸出は平成16年度で左京404,000冊、中央853,000冊、全館では6,146,000冊。予約・リクエストは全館で298,000件。入館者数は全体で3,721,000人。貸出登録39万人、3.8人に1人が登録。かなりな数字だ。

ここまでくるには1981年の創立以来二十年以上の歳月がかかった。図書運搬システムが出来るまでに17年、全館オンライン検索システムが出来るのに20年かかった。私はこうして便利になってから利用しはじめたわけである。この四月から自動貸出システムも稼働しはじめた。

<さらなる発展・拡充が望まれる>

各行政区に1館ないし4館設置されているが、規模が小さい。学術書が少ない、特に科学など理科系が少ない。雑誌はバックナンバーが貸出可で重宝だが、予算とスペースの関係でタイトル数が非常に少ない。その上1年しか保存しない。私がいつも利用している左京図書館の場合約60タイトルである。参考図書も信じられないほど少ない。ちょっとした調べものも中々満足に出来ない。CD、DVD、ビデオも備えていない。大阪では額縁付きで絵画まで貸し出しているのというのに。これではいま一つ便利でない。

カウンターはいつも忙しそうでなかなか職員に声がかけにくい。ましてじっくり相談などは出来ない雰囲気である。市の中央図書館に行けば参考図書はそこそこ揃っている。だが一々そこまで出掛けなければならない。収書方針も明確でない。それが明確ならリクエストでいいのか自分で買わなければならないかが事前にある程度判断できる。これがないのは利用者にとってかなり不便だ。だが明文化した収書方針がないのは京都だけ、公共図書館だけではない。大学ではより一層重要だろう。いま方針の明確化が検討されているという。

<抜本的改善への原動力は市民の要求>

近くにあることが重要であり、その地域の普通の住民の読書要求に応えることを使命とする性格からすれば、各地に設置し、大衆的ニーズに応えられる蔵書を一応備えたわけで第一歩を踏み出したところだろう。京都市は、今の図書館に満足することなく、真にまともな図書館を目指した長期計画を立てることが必要である。これは容易なことではない。それだけに抜本的改善への意欲と決意を市民が京都市に迫ることがきわめて重要であろう。

<大学図書館と公共図書館の連携>

大学生や研究者といえども最新の小説やエッセイなどへの要求もあるだろう。一般市民にも学術書や研究書が必要である。大学図書館と公共図書館が相互に連携すれば両者の資料が補完しあえる。この両者のネットワーク化が実現すれば、双方の利用者にとってその利益は計り知れない。

たけもと ふみお（元同志社大学図書）